

備陽史探訪

第 229 号
発行 会
備陽史探訪の会
福山市多治米町 5-19-8
TEL.070-1074-9617

備陽史探訪の会の目的
備後を中心とした
地域の歴史を研究し、
愛郷の精神を涵養する。
(会則第 1 章第 2 条より)

古代山城「茨城」の

探索と

備陽史探訪の会

会長 田口義之

常城・茨城は『続日本紀』養老三
年(719)の条に登場する古代山
城で、それぞれ芦田郡と安那郡に
あったとされ、古くから関心が持た
れていた。この両城の現地比定を最
初に試みたのは府中高校の豊元国氏
で、常城を府中市亀が岳一帯に、茨
城を福山市蔵王山山塊に比定した。

しかし、常城に関しては異説は出
ていないが、蔵王山説に関しては否
定的な見解も多かった。理由は蔵王
山山塊には古代山城のものと考えら
れる遺構が認められないことであっ
た。この備後古代史の謎に挑戦しよ
うとしたのがわが備陽史探訪の会で
あった。会の歴史をひも解くと、創
立間もない頃から古代山城探索の記
事が見られ、新聞にも大きく取り上
げられ、わが会の存在を世間に大き
くアピールした。

この頃の本会が注目していたの
は、神辺町の「木之上城」であった。
同城跡の「木」は「城(き)」に通
じるのではないか。現地を踏査する
と、稜線上には望楼と見られる台地

今回の会報で、松尾さんが報告(後
掲)されたように福山市加茂町北山
の「大スキ」の遺構が古代山城「茨
城」の遺跡である可能性が高まった。
そもそも、わが備陽史探訪の会の
発足と古代山城は深い関係があっ
た。備陽史探訪の会は昭和55年
(1980)5名の仲間ですタート
したわけだが、その最初の目標が備
後にあったとされる古代山城常城・
茨城の探索であった。



故七森義人氏 (右)

や土塁線が存在し、古代山城の可能
性が指摘された。この頃、本会の古
代山城研究をリードしていた七森義
人氏(故人)もこの土塁線を古代山
城に見られる「車道」に類する遺構
ではないかと指摘した。

こうした中で見出したのが、「芋
原の大スキ」であった。昭和六十年
三月の例会を、加茂町北山で行なう
こととなり、何度か行なった下見調
査で、同所に「大スキ」と呼ばれる
謎の空堀があることを知ったのであ
る。当日の例会資料を見ると、松尾
氏が作成した城壁断面とほぼ同じ図
が挿入され、七森氏の慧眼の鋭さに
驚かされる。以後、「大スキ」は『山
城探訪』でも取り上げられ広く知ら
れることとなった。

今回の共同踏査もこの本がきっかけ
であったことからみても、本会が古
代山城の探索に果たした役割は大き
かったと思う。今後は、「大スキ」が、
奈良時代初めまで存在した「安那郡
茨城」かどうか、皆さんと一緒に追
及していきたいと思う。

目次

古代山城「茨城」の探索と備陽史探訪の会	1
古代山城 茨城推定地の合同踏査について	2
ワンショット・レポート	2
調査報告	4
中世石造物の調査報告	5
研究レポート	5
福山城天守北壁面の鉄板装甲の目的 ― 勝成は何を考えていたのか ―	6
研究レポート	6
用之江森山城跡について	8
ワンショット・レポート	8
近世福山の歴史講座 45 回	10
第九部 水野時代総集編	10
四代勝種の時代(その 2)	11
勝種治世後編	11
史料紹介	11
井上家文書(6)	14
葛原函の作詞の校歌から歌詞にこめた 郷土の地名など	14
備陽史探訪の会 NEWS!	19
投稿俳句	19
事務局だより	20

新しい時代の 始まり?



も事なす
と行なく
となれて、
訪れさる
の訪れさ
に、色が
春に、開
が催され
んだかわ
今日この
いっちゃん

古代山城 茨城推定

ぬばらのき

て

松尾洋平

はじめに

備後国には『続日本紀』の養老三
年(七一九)十二月条に記載されて
いる「停備後国安那郡茨城葦田郡常
城」という記事から1国に2城が存
在し、同時に停止したことが知られ
ています。これまで茨城の比定地に

は北山説、蔵王山説、木之上説、要
害山説、井原説が提出されていまし
たが、古代山城と認められる確かな
遺構は発見されておらず、謎のペー
ルに包まれていました。こうした中、
福山市加茂町北山の芋原において令
和五年三月十三日に備陽史探訪の会
と古代山城研究会が合同して踏査を
実施したところ、古代山城に特有の
城壁線を確認しました。

合同踏査とその成果

令和五年二月十一・十二日に古代
山城研究会の例会が「備後国府と常
城」をテーマに府中市で開催され、
「脇坂説からみた常城推定地の城壁
線について」と題して発表の機会が

与えられた私は、同時に茨城を探し
ていました。

検討材料はいくつかあります。

まず第1に茨城が所属する拔原郷
(郡郷里制下の郷)は、養老五年の
安那郡の改編により安那郡と深津郡
に分かれ、分離後の安那郡に抜原郷
が所属することから、ここを探索す
れば自ずと茨城が見つかること。

第2に『大日本地名辞書』では「茨
はウバラと訓むも、和名抄にヌバラ
とあるは正訛の差別のみ」とあり、
「芋原」地名の音がウバラに通じる
のではないかと考えたこと。

第3に古代山城の城名と、所属す
る郷名が一致する例があり(大野城、
常城等)、いずれも日本の古代山城
の中では大型の部類に入り、茨城も
周長3km以上のグループに入ること
が想定されたこと。

第4に鬼ノ城が古代山陽道から約
7km離れているため、茨城もこうし
た距離観が許容できること。

第5に備後国の常城が標高四五〇
m以上の高所にあるため、茨城も標
高三〇〇m以上を想定し、合わせて
防御効果に優れた地形を取り入れて
いること。

こうした視点から地形図の判読を
繰り返し、国土地理院が公開する陰
影投影図を観察していたところ、芋

原を取り囲むライン(いわゆる大ス
キ跡)を確認し、さらに備陽史探
訪の会発行の『山城探訪』(1)や、

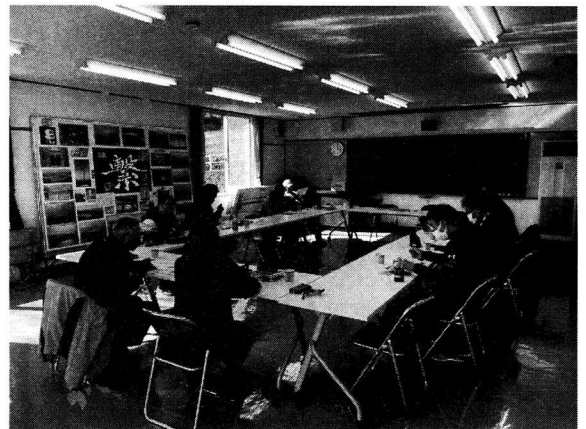
H.P. 広瀬公民館からも資料の提供
をうけて、二月六日に芋原の踏査を
行いました。倒竹や雑木に阻まれて
観察できないところもありました
が、北辺・南辺の大部分を見える
ことができ、大スキと呼ばれていた
溝の外側には、古代山城の城壁であ
る内托式土塁が並走し、長距離に及
んでいることがわかりました。

翌日、古代山城研究会の向井代表
に報告し、例会当日には幹事へ現認
を依頼しました。研究会には当会の
田口会長も参加されており、芋原に
古代山城が比定できるのではないか
とお伝えしたところ、三月十三日に
両会で合同の踏査を実施する運びと
なりました。

かつて、城壁線は芋原を取り囲む
ように周回していたようですが、す
でに消滅している所もあるので、合
同踏査では芋原の北辺と南辺の城壁
を踏査し全体を把握することに努め
ました。

その後、広瀬公民館にて得られた
知見や、古代山城の正否について意
見交換を行いました。

その大要は、
・古代山城研究会では選地や城壁の



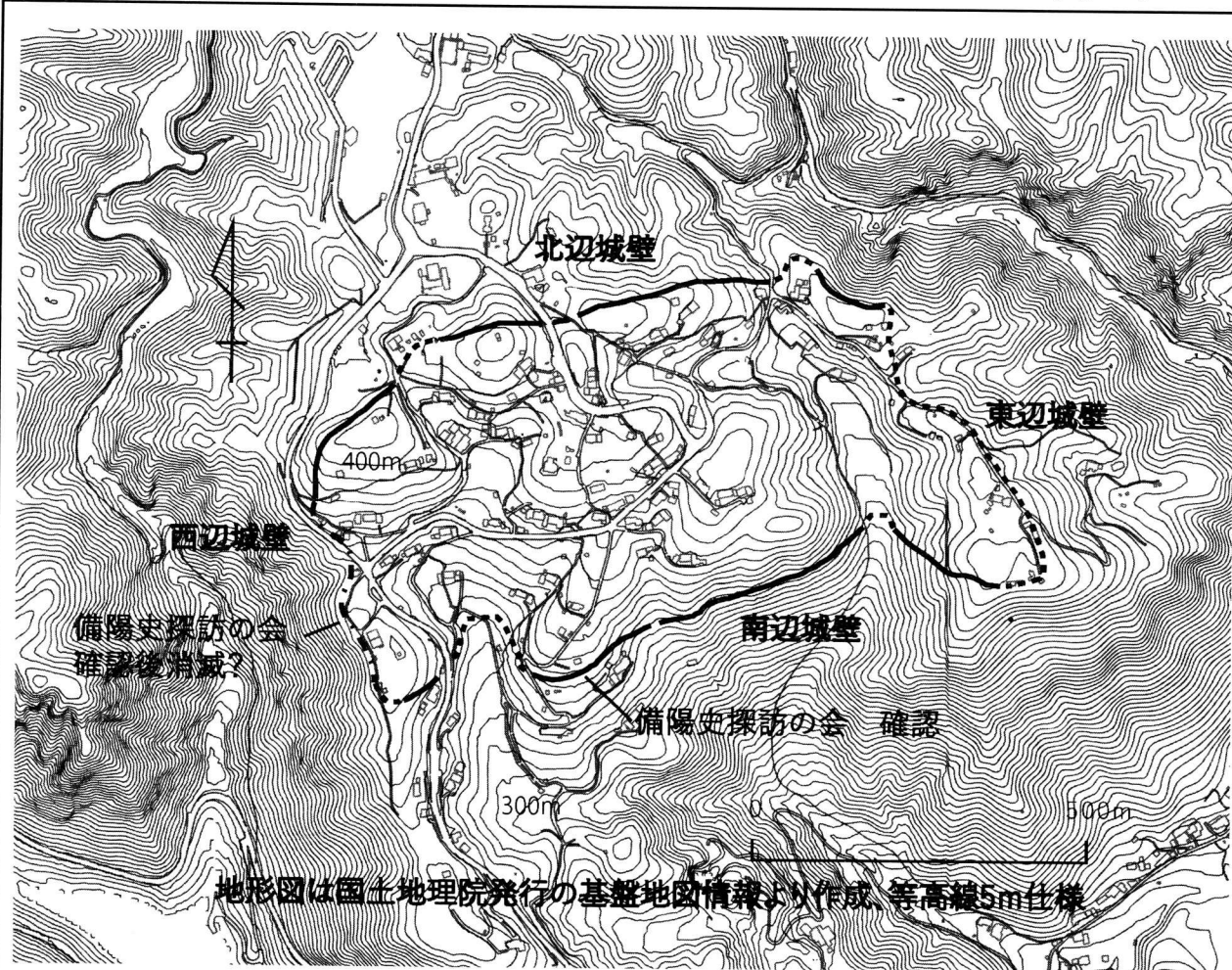
会議風景

形状・構造から、完成度の高い城壁
が良好に残され、当地が古代山城と
して認められるという見解が出され
ました。

・備陽史探訪の会からは、当初は古
代山城説を考えていたが、中世の志
川滝川城合戦で使われた陣城の可能
性も視野に入れていた。今回の踏査
により古代山城を再検討する機会と
なったので、継続的な調査が必要で
はないかと指摘されました。

当日、参加されたメンバーは次の
とおりです。(順不同・敬称略)。

・備陽史探訪の会：田口会長、篠原
副会長、杉本、森原
・古代山城研究会：向井代表、松波、
山元、渡邊、松尾



・福山市文化振興課・唐津、向井
 ・広瀬公民館・佐藤館長、佐藤主事

茨城推定地と城壁線

それでは芋原で確認した古代山城
 とはどのようなものだったのでしょうか

うか。ここで若干の説明を加えてみたいと思います。

まず、芋原の地形ですが、東・西・南の三方が急斜面地か断崖となっていて、自ずと敵の侵入を減殺する効果が得られています。それに対し北側は、吉備高原に接続するばかりでなく、山麓の東を流れる加茂川や、西の四川方面から入り込んだV字谷が山の背後に達し、後背部にあたる広瀬小学校周辺が合流点の一つになっています。敵の動きを想定したとき、山の三方が急峻なため、行軍は北側へ流されると考えられます。よく地形を見ると、城地の方が侵入経路の尾根より約二五mも高く、脅威に対処するための動静を窺うには十分な高さがあり、北辺の城壁もしつかりと造り込まれています。

次に城地は東から北、そして西に連なる尾根線と6つの頂部によってコ字形に城内を取り囲み、防御正面となる南側は山腹斜面を取り込んでいます。城内には二葉状を呈し中核となる頂部があり、そこから南東に向けて大小2ヶ所の頂部と、八幡神社から南西に向かって枝尾根が派生しています。

谷の状況を見ると城内の東西には北から南へ下る谷が2本入り、東の谷頭近くに現在、貯水地が設けられ、

西の谷頭にも貯水地があったようです。

他の山城の事例を見ると、谷頭には貯水池や水汲場が設けられ、城内の各所に鍛冶工房や礎石建物、掘立柱建物等が見つかっています。茨城でも今後こうした遺構が発見される可能性は高いと言え、当時使われていた須恵器や土師器、木器、木簡なども出土する可能性があります。

さて、芋原の準平原を取り囲んでいたとみられる城壁線ですが、向井一雄氏によれば日本の古代山城には3種類の城壁形状があると述べられています(2)。

夾築式土塁・尾根などに築造され、城壁の内外面に壁面が形成されます。

内托式土塁・傾斜変換線や山腹斜面に築造され、城壁の内側に低い内壁や内法が形成されます。城壁高は高く(3~5m)、累の背後には城内通路が敷設されます。

土段状土塁・傾斜変換線や山腹斜面に築造され、天端が土段となり、城壁高は1.5~3mと低く、城壁天端が通路を兼ねます。

この内、茨城の場合は、主に内托式土塁に該当します。規模を復元すると城壁の上面(天端)幅が6.5m以上、高さ約3m、内法の高さ約

1mを測り、背面には大規模に斜面が削り取られて、その底部が残されています。斜面整形と城壁に挟まれ、一見、溝に見えるこの底部こそ大スキの正体です。

ただ、城壁の壁面についてはすでに法肩が崩れているので正確なことはわかりませんが、鬼ノ城の例でいうと80度近い勾配で立ち上がっていたと考えられます。こうした内托式土塁が東・北・西の尾根から少し下った傾斜変換線に築かれていたのです。

残る南辺にも城壁は築かれ、山腹斜面を大規模に斜面整形し、その外側に土段が残されています。一見、土段状土塁のように見えますが、急斜面により土砂の埋積が進んでいるため、本来は内托式土塁だった可能性も考えられます。

城壁が良く残っている所や、かつて備陽史探訪の会が調査し『山城探訪』に掲載された城壁線などを参考にすると周長は約3km、城内面積は約41ha(東京ドーム約9個分)になることが判りました。

おわりに

『統日本紀』の記載では備後国に2城があり、その内の一つが安那郡の茨城と記されています。当地が古

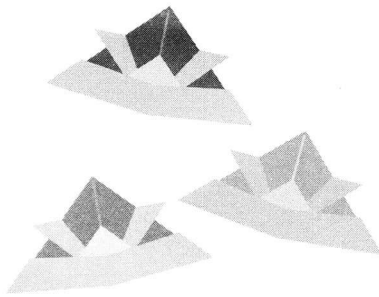
代山城である以上、「茨城」の可能性は極めて高いと考えられます。

今回の踏査では主に城壁線を検討したのですが、山城の普遍的な構成要素である城壁を比較検討することにより、山城の実態へ近づくことは可能でしょう。内托式土塁を採用している古代山城は、基肆城(六六五年築城)、屋嶋城(六六七年築城)、鬼ノ城などがあり、今後、こうした古代山城の比較検討を通して、「茨城」の実態解明が進むことを期待したいと思います。

註

(1) 『山城探訪』 備陽史探訪の会、平成7年

(2) 向井一雄『よみがえる古代山城』吉川弘文館、平成29年



ワンショット・レポート

～ぶら探訪・津之郷から赤坂を歩く/花見～

4月1日(土)、ぶら探訪「津之郷から赤坂を歩く」を開催しました。

当日は実に3年ぶりとなる花見も開催。天気もとてもよく、久しぶりの会食を楽しみました。

